

ローマ人への手紙 第5章 4節

「忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」

忍耐はいつ生まれるでしょうか。苦難が襲い、四面楚歌にあるとき、そこに居るしかない者に残されたのは耐え忍ぶことだけである。しかし、ただ忍耐するだけではない。約束を見つめつつ耐え忍ぶ。約束が耐える者にとり強烈な約束となって迫り来る。外からの約束が迫るなか、耐える者のキャラクターが変えられる。忍耐が生み出すキャラクターが耐え忍ぶ者をかたち造る。希望者となる。忍耐・約束・希望が耐え忍ぶ者に起こる。その者を見る者も約束を見つて希望を生きる忍耐する者とされる。

そろそろ夜には凍てつく季節が近づいている。澄み切った夜空の下に厳しい空気が流れる。そこに三つの蕾がついている。小春日和の日もあれば、夜の厳しさが続く日もある。やわらかな陽射しの日と刺すような寒さの日が繰り返す。それでも蕾のまま、あらゆる温度、天気にも耐えている。なかなか蕾のサイズの変化が見られない。もしかしたら、蕾のまままで終わるのかと危惧する。しかし、耐えている蕾を見つめる。蕾に忍耐を見ている。忍耐を見ながら蕾の堅固さを見せられる。その堅固さは、蕾は蕾で終わらない約束を証言しているようだ。そして、約束を証言する姿から、やがて咲き始まる希望さえ見せる。

2022年12月10日